ゲルリッツ市周辺地域における文化の多層性と図書館の可能性

寺田 卓矢[1]

はじめに

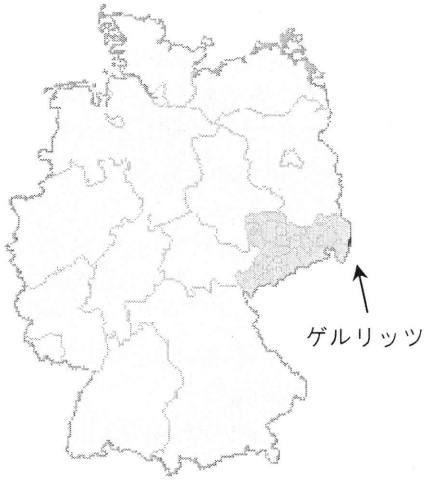
ゲルリッツ市 Görlitz（以下、ゲルリッツ）は、ドイツ連邦共和国ザクセン州東部、ドレスデン行政管区ゲルリッツ郡に属し、ドイツ・ポーランド国境のナイセ川（オーデル川の支流）左岸にある人口 55,446 人[2]の都市である。歴史的にはオーバーラウジッツ（現在のドイツ東部地域）あるいはシュレージエン（現在のポーランド南西部、ドイツ東部、チェコ北東部を含む地域）の中核都市の一つとして栄えてきた。

筆者らは 2011 年 9 月 2 日から 8 日までゲルリッツに滞在し、その周辺地域の多文化状況に触れる機会を得た。同地域は数百年に亘って領土問題に晒されており、第二次世界大戦の終戦（およびドイツ再統一）によって国境は確定されたものの、今なお複雑な問題を抱えている。時間的制約から、十分な調査活動を行うことはできなかったが、本稿ではゲルリッツにあるオーバーラウジッツ学術図書館に着目し、問題解決がどのように可能か、その糸口について考えたい。

1. ゲルリッツの概要

ゲルリッツは 11 世紀にスラブ人によって建設され、東西ヨーロッパ間の交易拠点として栄えた。鉱業や衣服関連産業が盛んとなり、近代以降は機械や鉄道車両製造でも知られるようになる。三十年戦争中の 1635 年にザクセン公国の支配下に入ったあと、1815 年、ウィーン会議により公国領の一部がプロイセン王国に割譲されたのに伴い、プロイセン領シュレージエンの一部となった。

第二次世界大戦終戦後はドイツ民主共和国（東ドイツ）の一都市となる。ポツダム会談での決定に基づき、同国はオーデル川とナイセ川をドイツとポーランドの国境（オーデル・ナイセ線）と認めたため、ナイセ川が市内を流れるゲルリッツ市は西側の東ドイツ領ゲルリッツ、東側のポーランド領ズゴジェレツ Zgorzelec に分断された[3]。ドイツ再統一から現在まで街が分断された状況は変わっていないが、次項で述べるように、近年は国境にとらわれず地域的な一体化を目指す試みが徐々に行われている。



ゲルリッツは思想や文化面で世界史的な貢献をしてきた都市の一つでもある。例えば思想史上はドイツ神秘主義者ヤーコプ・ベーメ Jakob Böhme（1575-1624）が活動した都市として知られる。また、第二次世界大戦中は現在のズゴジェレツ側にドイツの捕虜収容所「Stalag VIII-A」があり、捕虜の一人だった作曲家オリヴィエ・メシアン Olivier Messiaen（1908-92）が《世の終わりのための四重奏曲 Quatuor pour la fin du temps》（1941 年）を作曲、初演した場所として、音楽史にもその名を残している。

2. 課題(1)—ドイツ・ポーランドの地域的融和

ゲルリッツとズゴジェレツの交流は途絶していたが、ドイツ再統一後より小学校の交流授業が行われるなど変化の兆しが見られた。その後、ポーランドは2004年にEUに加盟、2007年にはパスポート無しで国境の往来が可能になるシェンゲン協定実施国に加わった。こうした進展を踏まえ、ゲルリッツとズゴジェレツは「ヨーロッパ都市Europastadt」として地域的融和を進めており、「2030年までに1都市、1行政、1議会」とする計画という[4]。

この点について、筆者らはゲルリッツ市内に2006年に開館し、連邦およびザクセン州の予算で運営されているシュレージエン博物館Schlesisches Museum zu Görlitzを見学することで、具体的な取り組みの一端に触れることができた。この博物館は、その名の通り歴史的シュレージエン地域を扱う博物館であり、解説文をドイツ語とポーランド語で併記する、ポーランド人を招いて交流事業を行うといった取り組みによって、地域的融和に貢献しようとしている。ただし、2011年9月の時点では、職員にポーランド人がいない、ドイツ人に比べポーランド人の来訪が少ないといった課題も残されている[5]。

また、都市規模に対しては相対的に大規模な施設やアンサンブル（約300名）を持つゲルリッツ劇場Theater Görlitzにおいても、特にポーランド人の若い世代に観劇してもらうことが課題の一つとして認識されている。そのため、作品は原語上演の場合もあるが、通常はドイツ語上演し、ポーランド語の字幕を付けているという[6]。

加えて、ゲルリッツとズゴジェレツの人口差（後者は31,96人[7]）や生活水準の格差、博物館や劇場などの文化施設がゲルリッツ側に集中しているといった偏りもある。

3. 課題(2)—被追放民を巡る問題

前項で述べた課題は、実はそれほど簡単なものではない。被追放民Vertriebeneを巡る問題のためである。以下、吉田耕太郎（2010）に依拠してこの問題に触れたい。

ここで言う被追放民とは、第二次世界大戦の終結によって、シュレージエンを含む現在のポーランドやチェコなどからドイツへ強制移住させられたドイツ系住民のことを指す。ドイツ各地に移り住んだ彼らは、様々な規模の「故郷の部屋Heimatstube」や「故郷の博物館 Heimatmuseum」といった施設を設け、関連する書籍や新聞記事、かつての日用品などを持ち寄って語り合うことで、故郷の記憶を継承してきた。

シュレージエン博物館は、彼ら被追放民の歴史を展示するという、もう一つの側面を持っている。同博物館は、各地に散らばる「故郷の部屋」や「故郷の博物館」の情報を収集し、実際に被追放民に由来する物品の展示もしている。ドイツ人来館者が多い現状では、こちらの側面のほうが同博物館の主たる存在意義となっていると言ってよい。被追放民の中には、シュレージエンはドイツであると今なお主張している者もおり、連邦とザクセン州の予算で運営される同博物館は、そうした主張が公的に承認されたと受け止められかねない。実際、同博物館開館の式典に招待されたポーランド政府関係者は全員欠席したという。

さらに付け加えるならば、ズゴジェレツ周辺は、ソ連の西方侵出によって土地を追われたベラルーシ、ウクライナ、リトアニア地方の人々がやはり「被追放民」として集まってきたという歴史を持つ。今回の滞在では、彼らの生活実態について調査することはできなかったが、こうした文化の多層性のために、ゲルリッツ周辺における問題は、おそらく一層複雑であろう。

作為的であろうと無かろうと、公的な博物

館による「展示」や「資料の整理＝カタログ化」がある種のイデオロギーの承認・普及機能を持ち得ることは、すでに多く指摘されているところである。吉田はシュレージエン博物館について、2つの問題点を指摘している。一つは「博物館が権威的な仕方で〔引用者注・シュレージエンに関する〕集合的記憶や文化的記憶を作り出してしまう」(p.132) ということ。もう一つは、「カタログ化やデジタル化がもたらす『脱土地化』」(同)、すなわち「食器」「机」などと分類されてカタログに記載されることで、被追放民に由来する個々の物品と不可分であった所有者の個人的記憶が剥ぎ取られ、被追放民の「記憶のミクロコスモスが失われてしまうのではない」(p.136) か、ということである。

4. オーバーラウジッツ学術図書館の可能性

こうした状況に何かしらの変化のきっかけを与えられるかもしれない存在として、ここではゲルリッツ市内北東部 (Neißstraße 30) にあるオーバーラウジッツ学術図書館 Oberlausitzische Bibliothek der Wissenschaften (以下、OLB) に着目したい。

OLBは、300年近い歴史を持つ現役の公立図書館である。ゲルリッツにはこれとは別に一般市民向けの市立図書館 Stadtbibliothek があるが、OLBは重要な写本、インキュナブラ (初期活版印刷物)、古地図等を含む約140,000冊の蔵書を持つ[8]、諸学術の専門図書館となっている。

OLBの基盤となったのは、ゲルリッツから南東約 130km の町シュヴァイトニッツ (Schweidnitz、現ポーランド領シュフィドニツァ Świdnica) の法律家ヨハン・ゴットリープ・ミリヒ Johann Gottlieb Milich (1678-1726) の蔵書である。1727年、ミリヒの遺言により、彼が所蔵していた大量の書籍と銅版画がゲルリッツの旧修道院図書館の蔵書とまとめられ、「ミリヒ都市・学校図書館 Milichsche Stadt- und Gymnasialbibliothek」として活用されることとなった。まもなくゲルリッツに啓蒙主義の波が押し寄せ、1779年にはオーバーラウジッツ学術協会が設立される。1804年、この協会は会員の言語学者、歴史家、法律家カール・ゴットロープ・フォン・アントン Karl Gottlob von Anton (1751-1818) の家、通称バロックハウスに本部を置き、同時にそれまで市役所や証券取引所を転々としてきた図書館もまたバロックハウス内に移され、この地域の学術拠点の一つを形成したのである。

筆者がOLBに期待を寄せるのは、第一に、OLBが、今日のドイツではなく、国境を超えた歴史的シュレージエン (およびオーバーラウジッツ) の記憶と情報の集積地であるためである。それは、OLBのそもそもの発端が現在のポーランドに住んでいた人物の蔵書であった、ということからも明らかであろう。そして第二に、OLBが今なおその役目を背負っていることが挙げられる。現在、OLBのウェブサイト上では、ドイツ、ポーランド、チェコ間の知識移転 Wissenstransfer とアイデンティティ探求 Identitätsfindung を促進する、という自身の特殊な役割が強調されている。現役図書館としての OLB は、過去の書物を「展示」するために存在しているのではない。この地域の (学術中心ではあるが) 膨大かつ多様な記憶と情報を今日に至るまで集め続け、現代の人々と結び付けているのである。

そして、OLBが現役図書館であることは、来館者 (読者) による「選択」の重視に帰結する。この点こそ、博物館と図書館が持つ決定的な違いの一つである。ここでは現代図書館の思想的基盤の一つを成している数学者・図書館学者シヤリ・ラマムリタ・ランガナタン Shiyali Ramamrita Ranganathan (1892- 1972) の有名な5原則のうち、第3原則「全ての本をその読者へ Every book its

reader」に基づいて考えたい。これはすなわち、図書館員（司書）は「良書」を読者に「与える」のではなく、できる限り偏向無く資料を集め、資料の選択・閲覧・評価については読者に委ねよ、ということだと解釈できよう。OLBの資料もまた、読者個々人の「選択」に委ねられており、この地域が抱える問題についてどのような立場に立つ人に対しても、自由な議論のための歴史的重みのある素材となり得る。OLBの側が何らかの価値判断を行わないという原則が守られるのであれば、博物館における「展示」のイデオロギー性を中和することが可能になるのではないだろうか。そうだとすれば、OLBがシュレージエン博物館の至近にあることの意味は大きい。

ただし、OLBは、その歴史の長さゆえに、やはり公的な文化史博物館（バロックハウスはゲルリッツ文化歴史博物館 Kulturhistorisches Museum Görlitzの建物でもある）としての側面も持っており、今後の展開を注視する必要があると言えよう。例えば、歴史的書物を収めた書庫は、かつては年代の古い資料であっても来館者が自由に手に取ることができたというが[9]、2011年9月の時点では、観光客のために整備され、各所に解説文が用意されるとともに、立ち入り可能な場所を制限する、書架に金網を張るといった措置がとられている。前述の通り、ゲルリッツは交易拠点としての歴史を持っていることから、2011年5月21日から10月31日まで、ザクセン州による「王の道 via regia」展覧会が開催されており、筆者が訪問したのもその期間中であった。OLBのウェブサイトによれば、バロックハウスは現在改装中（2012年末までの予定）とのことであるが、立ち入り制限が展覧会開催に伴う臨時措置なのか、当面このような措置が継続されるのかは不明である。

むすび

議論を少し広げて、本稿を閉じたい。今回の滞在では、ベルリンの劇場や美術館を訪ねる機会も多かったが、そういった施設で多くの関連書籍が売られている場面をよく見かけた。直接的には来場者の知的好奇心に応えるためなのであろうが、そのような充実した書籍販売にもまた、演目や展示によるイデオロギーの増殖を抑制し、来場者に価値判断のための複数の選択肢を提供するという意図があるのではないだろうか。

図書館と他の文化施設はそれぞれ独自の歴史、理念、根拠法を持つため、別々に議論されがちである。しかし、「選択」優位の性質を重視してきた近現代図書館の機能は、「展示」優位の他の施設を補完し得るのであり、両者の関係に焦点を当てた議論がなされても良いだろう。

---

[1] 神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻芸術文化論 博士後期課程。
[2] 2011年7月31日現在。ザクセン州統計局がインターネット上で公開している情報による。
[3] ゲルリッツの地図は、Wikimedia Commons http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lage_der_kreisfreien_Stadt_G%C3%B6rlitz_in_Deutschland.png?uselang=ja （2012年1月2日アクセス）による。
[4] 『朝日新聞』2008年1月31日。
[5] これらの点は、シュレージエン博物館学芸部長マルティナ・ピーチュ Martina Pietsch 氏より伺った。
[6] これらの点は、ゲルリッツ劇場総支配人代理フィリップ・ボーマン Philipp Bormann 氏より伺った。オペラ、バレエ、クラシックコンサートを担うゲルリッツ劇場は、主に演劇上演を行うツィッタウ劇場 Theater Zittau とともにゲルハルト・ハウプトマン劇場ゲルリッツ－ツィッタウ Gerhart Hauptmann-Theater Görlitz-Zittau として活動している。ザクセン州や周辺の町からも資金提供を受けており、周辺地域の町でのアウトリーチ活動も行っている。
[7] 2010年現在。ズゴジェレツ市がインターネット上で公開している情報による。

[8] 蔵書カタログが公刊されている。Wenzel, M., Herrmann, F., Vogt, K., Oberlausitzische Bibliothek der Wissenschaften zu Görlitz. 1997. *Die Kartensammlung der Oberlausitzischen Bibliothek der Wissenschaften: ein Bestandsverzeichnis.* Schriftenreihe der Städtischen Kunstsammlungen, vol.25. Görlitz: Städtischen Kunstsammlungen.
[9] 藤野一夫・神戸大学大学院教授による。

◆参考文献

Vater, Frank. 2010. *GÖRLITZ: Eine Stadt mit vielen Gesichtern – Geschichte, Architektur, Kultur.* Görlitz: via regia Buchhandlung.

金井和之、国末憲人（2008）「自由の外側、新たな壁 欧州国境往来「シェンゲン協定」」『朝日新聞』2008年1月31日

フランク・B・ギブニー編（1973）『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 2』ティビーエス・ブリタニカ

藤野一夫（2007）「分断都市 多文化に託す明日」『朝日新聞』2007年10月26日

吉田耕太郎（2010）「文化空間としてのシレジア―シレジア博物館（ゲアリッツ）のプロジェクトの紹介と問題点」大阪大学ドイツ文学会編『独文学報』第26号、pp.121-137

ヴィンフリート・レーシュブルク（宮原啓子、山本三代子訳）（1994）『ヨーロッパの歴史的図書館』国文社

◆参考ウェブサイト

Oberlausitzische Bibliothek der Wissenschaften. http://www.olb.goerlitz.de/ （2012年1月1日アクセス）

Statistisches Landesamt des Freistaates Sachsen. „Bevölkerung des Freistaates Sachsen jeweils am Monatsende ausgewählter Berichtsmonate nach Gemeinden.“ http://www.statistik.sachsen.de/download/010_GB-Bev/Bev_Gemeinde.pdf （2011年12月25日アクセス）

Zgorzelec oficjalny serwis miasta. http://www.zgorzelec.eu/ （2012年1月4日アクセス）